

# 生きる意味の類型・深さと実存的空虚感との関連

—看護学生と大学生の比較から—

浦 田 悠

## 1. 問題と目的

近年、社会科学の領域において、生・老・病・死の意味についての関心が高まっており、心理学においても、従来の枠組みに収まりきらない人間理解や方法論の急速な展開と相まって、自己や他者の人生や、病気や死の意味づけ、意味生成についての研究が関心を集めている (e.g., Neimeyer, 2000; Reker & Chamberlain, 2000; やまだ, 2000)。

生きる意味<sup>1</sup>について、心理学の領域では、Franklの理論を元に作成されたPurpose in Life Test (以下PILとする) (Crumbaugh & Maholick, 1969) を端緒に、量的手法によるさまざまな心理尺度が作成され、意味経験の構造や機能について、多くの研究がなされてきた (Reker, 2000)。Reker & Wong (1988) は、これらの研究を、個人的意味 (personal meaning) あるいは実存的意味 (existential meaning) の研究<sup>2</sup>としてまとめ、個人的意味を「秩序や一貫性、自己の存在の目的や、価値ある目標の追求と達成を認知していることと、満足感を伴っていること」と定義している。その上で、個人的意味を、「構成要素 (structural components)」、「意味の源 (sources of meaning)」、「意味の広さ (breadth of meaning)」、「意味の深さ (depth of meaning)」の4つの次元から整理している。

意味の源あるいは意味のカテゴリー<sup>3</sup>に関して、Ebersoleらは、生きる意味についての自由記述を用いて、成人 (DeVogler & Ebersole, 1981)、大学生 (DeVogler & Ebersole, 1980; Ebersole & DeVogler, 1981)、前青年期 (DeVogler & Ebersole, 1983)、児童 (Taylor & Ebersole, 1993)、高齢者夫婦 (Ebersole & DePaola, 1987; 1989)、アメリカ在住のメキシコ人一世 (Jenerson-Madden, Ebersole, & Romero, 1992) など、幅広く調査を行い、それぞれの発達段階や文化において、どのような生きる意味のカテゴリーが多く見られるのか、ということを中心に検討している。生きる意味のカテゴリーに関して、Ebersoleらは、Battista & Almond (1973) による 人生の志向性 (life-orientation) についての分類を起点に修正を重ね、1987年までに、「関係 (Relationships)」、「奉仕 (Service)」、「信条 (Belief)」、「獲得 (Obtaining)」、「成長 (Growth)」、「健康 (Health)」、「ライフワーク (Life Work)」、「喜び (Pleasure)」、「その他 (Miscellaneous)」の9つのカテゴリーを大半の研究に見出している (Ebersole & DePaola, 1987)。その一連の研究で、成人・大学生とも、「関係 (Relationships)」が最もよく選択される意味のカテゴリーであること (DeVogler & Ebersole, 1981)、高齢者は成人に比べ「信条 (Belief)」が少なく、「健康 (Health)」や「喜び (Pleasure)」のカテゴリーが多いこと (Ebersole & DePaola, 1987)、前青年期では、意味がまだ発達していないと考えられ、「学校

(School)」や「課外活動 (Activities)」,「容姿 (Appearance)」などのカテゴリーを新たに追加する必要があること (DeVogler & Ebersole, 1983) などが示されている。その一連の研究の中で開発されたのが, Meaning Essay Document<sup>4</sup> (以下MEDとする) である。

MEDは, それまで幅広く用いられてきたPILに代わるテストとして, 自由記述を用いて, 生きる意味 (meaning in life, life meaning) のカテゴリーと深さを検討するために開発された。PILが主に情動的な意味感の強さを取り上げるのに対し, MEDは, より知的・認知的な側面を取り上げるものであるとされる (Ebersole & Quiring, 1991)。また, 後にDeVogler-Ebersole & Ebersole (1985) は, 生きる意味の深さ (depth of meaning in life) を5段階で評定する基準を示している。

浦田 (2005) は, 大学生を対象として, MEDと類似の教示による生きる意味についての自由記述を分析し, 「関係」, 「成長」, 「喜び」の3つを, 大学生の主な「意味の源 (sources of meaning)」として見出している。その結果, 多様な生きる意味を持つ者は, 実存的空虚感が低く, 精神的健康が高いという結果が示されている。しかし, それぞれの意味のカテゴリーの違いが, 価値観や感情とどのような関連があるのか, また, その記述内容の深さが, 実存的空虚感とどのように関連するのか, ということは明らかにされていない。また, 欧米の先行研究においても, 生きる意味のカテゴリーの違いと意味の深さや精神的健康の関連について詳細に検討したものは見当たらない。

以上を踏まえ, 本研究では, 看護学生を対象とし, MEDを用いて, 生きる意味のカテゴリーとその深さについて, 実存的空虚感との関連から分析し, 欧米での先行研究と, 浦田 (2005) による大学生のデータとの比較を行う。今回, 看護学生を対象とするのは, 先行研究において, 青年期における自我同一性確立や死生観のありかたが, 非看護系の大学生とは異なることが指摘されており (中新・谷原・長江・大場・太田・砂田・山口・留田・福山, 2005; 糸島, 2005), それらに深く関連すると思われる生きる意味に関する価値観についても, 大学生とは異なる特徴が見出されることが予想されるからである。

具体的には, 生きる意味の深さはそれぞれのカテゴリーといかなる関連があるのか, あるいは, 生きる意味のカテゴリーの違いや深さによって, 生きる意味を感じる程度に違いがあるのか, ということを検討することによって, 青年期における生きる意味の様相を明らかにしたい。

## 2. 方法

**手続きと調査対象** 大阪府内の看護専門学校生150名に質問紙を配布し, 回答に不備のあったものを除いた147名 (女性124名, 男性23名, 平均21.43歳) を分析の対象にした。そのうち自由記述については, 無回答を除いた132の記述を対象とした。調査時期は2006年7月。なお, 今回は大学生との比較のため, 2002年に大学生に実施した, 実存的空虚感尺度と生きる意味についての自由記述による調査データも用いて分析を行うこととする。分析の対象としたのは, 関西の大学生161名 (女性108名, 男性53名, 平均21.54歳) である。そのうち自由記述については, 無回答を除いた107の記述を対象とした。

**調査内容** 以下の二つの尺度を用いた。

1. DeVogler & Ebersole (1980) によって作成された Meaning Essay Document (MED) を翻訳した尺度を用いた。尺度は2つの質問から構成されている。質問項目は、「今現在の、あなたの最も大きな生きる意味はなんですか？もしも、あなたが、今現在、生きる意味がないと感じているのであれば、ここ\_\_\_\_に○をつけて、どのように意味を失ったのか、もしくは、なぜ意味がないと思うのかを書いてください」、「あなたの生きる意味（もしくは意味のなさ）が、より分りやすくなるような、あなた自身の体験例を書いてください」の2つである。回答にはA4の用紙を用い、それぞれの質問に対する余白の大きさは等しくし、余白内に自由記述を求めた。

2. 浦田 (2005) で作成された実存的空虚感尺度の13項目を用いた。「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法である。この尺度は、実存的空虚の認知的側面である「ニヒリズム」と、むなしさ感などの情動的側面である「生活の目的喪失」の2つの下位尺度からなる。

### 3. 結果

#### 1. 生きる意味のカテゴリーと深さの分析

##### 1-1. 生きる意味のカテゴリーについて

MEDによって得られた自由記述について、Ebersole & DePaola (1987) で示されている8つのカテゴリーに基づいて分類した。複数の記述や2つ以上のカテゴリーにまたがった記述については、より記述量が多く中心的なカテゴリーと思われるもののみを取り上げた。また、分類に際し、たとえば、「私の生きる意味はあります。あるというか、生きることが当たり前だと思う…この世に生まれてきたから生きる意味があると思う」、「生命を授かったから生きている」、「今現在では、私にとっては生きるということ自体が生きる意味です」など、既存のいずれのカテゴリーにも当てはまらず、かつ特徴的な共通性を持った記述が見られたため、それらを新たに作成した「存在 (Being)」というカテゴリーにまとめ、「その他 (Miscellaneous)」も含めた10のカテゴリーに基づいて、自由記述を分類した<sup>5</sup>。カテゴリーとその内容はTable 1の通りである。

筆者を含む2人の評定者によって分類したところ、分類の一致率は81%であった。分類について、不一致であったものに関しては、評定者で協議の上で、再分類を行なった。それぞれのカテゴリーの割合を、海外の先行研究や、浦田 (2005) で得られた大学生群の分類結果とともに、Table 2に示す。これを見ると、アメリカの大学生に実施された調査 (DeVogler & Ebersole, 1980) に比べ、日本の大学生、看護学生ともに、「成長」と「喜び」の割合が多いのに対し、「信条」がほとんど見られないことが特徴的である。

次に、自由記述から得られたカテゴリーを対象に $\chi^2$ 検定を行なった結果、看護学生群と大学生群とで有意な差が見られた ( $\chi^2 (9) = 23.70, p < .01$ )。残差分析の結果、「喜び」(看護学生-2.6, 大学生2.6,  $p < .05$ ) において有意差が見られた。

また、大学生、看護学生のどちらの群においても7割以上が「関係」、「成長」、「喜び」のいずれかに分類されていたため、以下の分析では、この3つのカテゴリーを中心に検討することとした。

Table 1

生きる意味のカテゴリー (Ebersole &amp; DePaola, 1987 より改変)

| カテゴリー               | 内容                                                                                                      |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 関係 (Relationships)  | 家族、友人、恋愛関係などの対人関係への姿勢。“私にとって友人やボーフレンドと過ごすことがもっとも意味深い”など。                                                |
| 奉仕 (Service)        | 抽象的な人への援助、授与の姿勢。“私の意味は、子供が学ぶのを手助けすることだ”など。                                                              |
| 信条 (Belief)         | (宗教的・政治的・社会的な) 信念・信仰に基づいて生きること。“今、神を見出して、私の人生は意味に満ちている”など。先行研究全体で、圧倒的に宗教的な性質を帯びたものが多い。                  |
| 獲得 (Obtaining)      | 純粋に物質的なものへの嗜好の強調。尊敬や成功や名声などの心理的な報酬の獲得はこのカテゴリーにはあてはまらない。“安全でいられるように、できる限りお金を持っていたい”などがこのカテゴリーにあたる。       |
| 成長 (Growth)         | 自己修養、自己理解 (目標達成、能力の向上、自己価値観の増大、独立など) を通じた意味。“私は自分自身を見つけ、能力を向上させるために生まれた。変化し、成長し、目標に到達することが人生である”など。     |
| 健康 (Health)         | 心身の健康の維持からの意味。“私はできる限り健康でいたいという思いが一番強い”など。                                                              |
| ライフワーク (Life Work)  | 仕事・労働に由来する意味 (これは学校へ行くことが仕事と似ているとみなされる場合も含まれる)。しかし、家族に意味を見出している主婦は関係のカテゴリーに入る。“私は仕事によって人生に面白みを感じている”など。 |
| 喜び (Pleasure)       | 喜びや幸せ、満足、あるいは日常生活の経験が最も意味深い、というような一般的な表現。“私の意味は、一日一日をできるだけ楽しむことだ”など。                                    |
| 存在 (Being)          | 自分が自分として生まれ、ここに存在すること自体が意味である、という表現。“生まれてきたことが私の生きる意味だ”など。                                              |
| その他 (Miscellaneous) | いずれの既存のカテゴリーにも属さないような記述。約5%がこのカテゴリーに入る。                                                                 |

Table 2

生きる意味のカテゴリーの割合

| 対象     | DeVogler & Ebersole (1980) | DeVogler & Ebersole (1981) | Ebersole & DePaola (1987) | 浦田 (2005) |    | 本研究       |    |
|--------|----------------------------|----------------------------|---------------------------|-----------|----|-----------|----|
|        | 大学生<br>%                   | 成人<br>%                    | 老年夫婦<br>%                 | 大学生<br>%  | n  | 看護学生<br>% | n  |
| 関係     | 37                         | 51                         | 45                        | 32        | 36 | 27        | 36 |
| 奉仕     | 5                          | 3                          | 6                         | 1         | 1  | 5         | 6  |
| 信条     | 18                         | 26                         | 3                         | 1         | 1  | 0         | 0  |
| 獲得     | .5                         | 0                          | 3                         | 0         | 0  | 2         | 2  |
| 成長     | 13                         | 6                          | 0                         | 22        | 25 | 30        | 39 |
| 健康     | .5                         | 7                          | 22                        | 0         | 0  | 0         | 0  |
| ライフワーク | 10                         | 3                          | 0                         | 0         | 0  | 2         | 2  |
| 喜び     | 10                         | 0                          | 19                        | 28        | 32 | 14        | 19 |
| 存在     | -                          | -                          | -                         | 2         | 2  | 7         | 9  |
| その他    | 6                          | -                          | -                         | 9         | 10 | 3         | 4  |
| 無意味    | -                          | 3                          | -                         | 6         | 7  | 11        | 15 |

Table 3

生きる意味の深さの5つの評定基準 (DeVogler-Ebersole & Ebersole, 1985, p.305 より)

- 1 より中心的な意味が複雑に記述されており、意味に関して個性的な感覚を持っている場合、より深い意味であると評定する。
- 2 意味や例がよりはっきりしており、信頼でき、具体的で、現実的なもののほど、より深い意味であると評定する。
- 3 意味が、新奇なもので、それゆえに未経験で浅薄であれば、あまり深くない意味であると評定する。
- 4 評定者自身が、回答者が高い意味を持っているか、低い意味を持っているかを判定する。必ずしも、回答者の意味の深さの判断と一致するわけではない。
- 5 評定者が混乱したり、確信を持てない場合、その記述を「中程度」のカテゴリーに分類する。あるいは、何も例が示されていないものや、重要でないことが書かれている場合、中程度以上のカテゴリーに分類しないほうがよい。

## 1-2. 生きる意味の深さについて

生きる意味の深さ (meaning in life depth) に関して、看護学生から得られた147の自由記述について、筆者を含む2名の評定者によって、DeVogler-Ebersole & Ebersole (1985) による意味の深さの5つの評定基準 (Table 3) と、Ebersole & Quiring (1991) やEbersole (1998) の評定の具体例に基づいて5段階の評定を行なった。結果、評定の一致率 (Pearsonの積率相関係数) を算出したところ、十分に高い値が得られた ( $r = .80, p < .01$ )。この評定結果に基づいて、生きる意味の深さについては、2人の評定結果の平均値を最終的な意味の深さのスコアとし、以後の分析に用いることとした。評定に際し、浅いと評定された回答例としては、「これからを楽しむため」、「夢」といった、具体性に欠け、漠然としており、短い記述にとどまっているものが含まれる。一方、深いと評定された回答例としては、「看護師になるための技術、知識を習得し、看護師の国家資格を取得し、看護師として患者を助けるために働き、安定した収入を得て家族を養いたいので、勉強を頑張っているということ」、「私の最も大きな生きる意味は、看護師になることです。毎日実習に行き、患者さんのところで学習させていただき、人と人とのつながりを実感する。生きるということは、看護師に一步步近づいていってることだと思う」というように、より具体的に複雑な記述がなされているものが含まれる。

また、生きる意味のカテゴリーと深さとの関連を検討するため、「関係」、「成長」、「喜び」の3つのカテゴリーを独立変数、生きる意味の深さのスコアを従属変数とした分散分析を行った。3群の意味の深さのスコアの平均値をFigure 1に示す。分散分析の結果、有意な群間差が見られた ( $F(2, 89) = 5.01, p < .01$ )。HSD法による多重比較を行ったところ、「関係」群と「喜び」群の間に有意な得点差が見られた。

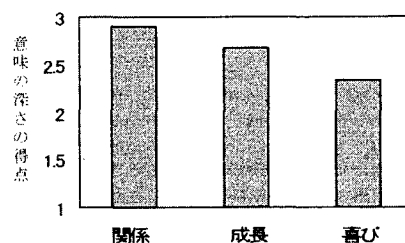


Figure 1. 3群と意味の深さの得点

## 2. 実存的空虚感尺度の得点化

実存的空虚感に関して、まず、実存的空虚感尺度の尺度得点の平均値と標準偏差を算出した (Table 4)。各下位尺度

Table 4  
実存的空虚感下位尺度の記述統計量

|         | 項目数 | 平均    | SD   | $\alpha$ |
|---------|-----|-------|------|----------|
| ニヒリズム   | 8   | 19.93 | 6.30 | .79      |
| 生活の目的喪失 | 5   | 12.83 | 4.70 | .77      |

の信頼性について、Cronbachの $\alpha$ 係数は、「ニヒリズム」で.79,「生活の目的喪失」で.77であり、尺度の一定の信頼性が確認された。

次に、看護学生群と大学生群での実存的空虚感得点の差を検討するために、実存的空虚感の各下位尺度得点について検定を行なった。その結果、「生活の目的喪失」において、大学生よりも看護学生のほうが、有意に高い得点を示していた ( $t(307) = 2.23, p < .05$ )。また、看護学生のデータについて、実存的空虚感尺度の各下位尺度得点の平均点を各学年で比較するために分散分析を行った。3学年の得点の平均値をFigure 2に示す。結果、「ニヒリズム」において有意な群間差が見られた ( $F(2, 145) = 3.47, p < .05$ )。HSD法による多重比較の結果、1年生と2年生との間に有意な得点差が見られた。

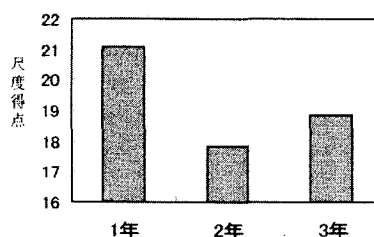


Figure 2 3学年とニヒリズム得点

### 3. 生きる意味のカテゴリーと実存的空虚感の関連

次に、実存的空虚感と生きる意味のカテゴリーとの関連を検討した。ここでは、大学生と看護学生のデータを併せて用いた。

「関係」、「成長」、「喜び」の3つのカテゴリーを独立変数、実存的空虚感尺度の各下位尺度を従属変数とした分散分析を行った結果、「ニヒリズム」において有意な群間差が見られた ( $F(2, 183) = 4.13, p < .05$ )。Figure 3に3群の各得点を示す。HSD法による多重比較を行ったところ、喜び>関係=成長という結果が得られた。

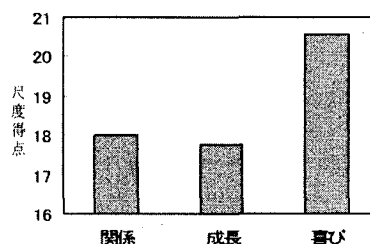


Figure 3 3群とニヒリズム得点

### 4. 生きる意味の深さと実存的空虚感との関連

生きる意味の深さについて、1-2で得られた生きる意味の深さのスコアと実存的空虚感の各下位尺度との相関係数を算出した結果、「ニヒリズム」と意味の深さとの間に負の相関 ( $r = -.29, p < .01$ ),「生活の目的喪失」と意味の深さとの間にも負の相関 ( $r = -.20, p < .05$ ) が認められた。

## 4. 総合考察

### 生きる意味のカテゴリーについて

本研究では、生きる意味についての自由記述を中心に、青年期における生きる意味のカテゴリーについて検討した。その結果、大学生では看護学生よりも「喜び」のカテゴリーに多く偏りがあるものの、浦田(2005)の大学生での調査と同じく、看護学生においても「関係」と「成長」と「喜び」が主要なカテゴリーであることが示された。

欧米の先行研究と比較すると、生きる意味の源として、「信条」がほとんど見られないという

ことが特徴的である。これに関して、たとえば金児（1997）も、1986年から95年にかけて大学の新入生に実施した調査結果などをもとに、現代日本の青年の宗教行動は、挫折において信仰を自覚するような、実存的関心はほとんどなく、初詣でや墓参りなど、社会規範・習俗という趣が強い、としており、一般に、確固たる宗教的な信仰を生きる意味の源としている青年は少ないと思われる。

一方、本研究では、欧米での先行研究では見られなかった生きる意味の新たなカテゴリーとして、「存在（Being）」というカテゴリーを作成した。これは、生きること、存在していること自体に意味がある、というような内容の記述であるが、このような記述の具体例として挙げられているのが、近親者の死、あるいは重大な病気や事故など自身の生死に関わる体験や、新しい命が誕生するという出産場面に立ち会った体験などであった（看護学生では、「存在」のカテゴリーの全9例中6例）。一方、近親者の死に立ち会ったために、生きる意味のなさを感じた、という記述も2例もあり、いずれにしても、生や死に関わる体験が、人生観を大きく揺さぶる体験であるということが考えられる。

欧米では、生きる意味のカテゴリーあるいは意味の源について、本研究で使用したMEDの他にも、Reker（1996 Reker, 2000より）によるSources of Meaning Profile-Revised（SOMP-R）、Wong（1998）によるPersonal Meaning Profile（PMP）などの尺度も開発されているが、わが国ではこの領域のまとまった研究は見当たらず、今後の知見の蓄積が必要である。

#### 生きる意味の深さ・カテゴリーと実存的空虚感との関連について

生きる意味の深さについて、本研究では、DeVogler-Ebersole & Ebersole（1985）のMEDの5つの評価基準を用いて、自由記述の意味の深さを評定したところ、2人の評定者間の一致率は十分に高く、MEDが一定の信頼性を持つことが確認された。

生きる意味の深さと実存的空虚感の間には、各下位尺度とも、有意な負の相関が見られ、生きる意味が深いほど、実存的空虚感が低いということが示唆された。このことは、より複雑で具体的・現実的な意味を経験している者は、人生には意味があると考えており、日々の生活にむなしさを感じることが少ない、ということを示している。

生きる意味のカテゴリーと実存的空虚感との関連については、実存的空虚感尺度の「ニヒリズム」において、「喜び」群が「関係」群、「成長」群よりも有意に得点が高いという群間差が見られた。この結果と、カテゴリーと意味の深さに関して「関係」群よりも「喜び」群のほうが、意味の深さのスコアが低かったという結果とを合わせると、喜びを経験することや幸せを追求することを生きる意味の源としている者は、他者との関係を生きる意味の源とする者よりも、意味の深さが浅く、かつ虚無的な人生観・世界観を持っているという可能性が考えられる。この結果は、「意味への意志が欲求不満に陥ったその場所が快楽への意志によって占領され」（Frankl, 1972 山田他訳 2004, p. 20）、実存的欲求不満に陥るという、Franklの理論を想起させる。これに関連して、Reker & Wong（1988）は、Frankl（1963）やRokeach（1973）の理論に基づき、意味の深さを自己超越（self-transcendence）の度合いから4つのレベルに分けている。すなわち、快楽主義的な喜びや快適さに没入すること（レベル1）、個人的な能力の実現に時間とエネルギーをささげること（レベル2）、利己心を超えて他者を世話することや、より大きな社会的・公的

なものにコミットすること（レベル3）、個人を超え、宇宙的意味や、究極的な目的を含むような価値を受け入れていること（レベル4）の4つである。そして、Reker（1991 Reker,2000より）は、レベル3とレベル4から意味を経験している者のほうが、レベル1とレベル2で意味を経験している者よりも、より満たされ、満足しているということを示している。この4つのレベルにおいて、レベル1は「喜び」のカテゴリーに、レベル2は「成長」のカテゴリーに、レベル3は「関係」と「奉仕」のカテゴリーにおける内容を含むものであると言えるが、生きる意味の源において、個人的な喜びよりも、他者との関係性が重要であることを示唆する本研究の結果は、このRekerらの理論と整合的であるといえよう。

### 看護学生の生きる意味、実存的空虚感について

本研究では、看護学生の実存的空虚感尺度の各下位尺度得点の平均値を各学年で比較したところ、「ニヒリズム」において、1年生は2年生よりも有意に高いという結果であった。これに対し、看護学生を対象とし、PILを用いて人生の意味・目的意識を検討した先行研究（齋藤・小林・丸山・花屋・柴田・田多, 2000; 齋藤・丸山・小林・花屋・柴田, 2001, 齋藤・小林・丸山・花屋・柴田, 2002）では、縦断的・横断的分析ともに、人生の意味・目的意識は、1年生が最も高く、2・3年次では低下するという一貫した結果が示されており、本研究では、それらとは逆の傾向が示唆されたことになる。

この結果の相違の原因として考えられるのは、調査時期の違いである。先行研究はいずれも4月に調査されたものであり、その時期は、1年生は、高校卒業と短大合格という目的を達成し、充足感を味わっている時期と考えられる。しかし本研究を実施した7月という時期は、入学から3ヶ月が経ち、一度入学によって完了したかのように見えた自我同一性が、「ここまでしてなんで看護師になろうと思ったんやろうって感じ」、「毎日同じ繰り返しの中で、正直何の意味があるかなんてわからない」（ともに1年生のMEDの記述より）というような同一性拡散の危機に向かいやすい時期であるとも考えられる。この結果は、看護学生が入学以降、同一性拡散の危機を経験するのは、先行研究よりも早い時期であることを示唆しており、この点については、さらにスパンを短くした縦断研究が必要である。

看護学生と大学生との生きる意味のカテゴリーと実存的空虚感との関連について、看護学生は、大学生に比べ、「喜び」を生きる意味の源とする割合が少なく、実存的空虚感の「生活の目的喪失」が高いということが明らかになった。この結果は、看護学生が情動的側面においては、大学生よりも空虚感が高いということを示唆している。これについては、看護学生は、大学生よりも日々の実習などで忙しいなどの生活パターンの相違が考えられるが、他の心理的要因を併せて検討する必要があるだろう。

### MEDの問題点について

MEDは、意味のカテゴリーと深さについて、PILのように自己評価ではなく、研究者の側が評定するものである。この利点は、全ての対象者の記述から得られた参照枠をもとに、意味のカテゴリーと深さを判定できるということであるが、これはそのままMEDの問題点ともなっている。

意味のカテゴリーに関しては、先行研究では、評定者間の一致率は80% (DePaola & Ebersole, 1995) から93% (DeVogler & Ebersole, 1983) と高い水準を保っている。一方、深さについては、.43 (Ebersole & DePaola, 1987) から.82 (DeVogler-Ebersole & Ebersole, 1985) と、一致率に差が認められる。本研究においては、カテゴリー、深さとも、評定者間の一致率は高かったが、これには評定者のバックグラウンドが共通していることが作用している可能性も考えられる。これに関して、DeVogler-Ebersole & Ebersole (1985) は、異なる研究グループに属する評定者との一致率を検討し、意味の深さに関して.78 (Pearsonの相関係数) という高い一致率を得ており、必ずしも評定者間の親和性が一致率を高めるわけではない、としているが、その後の研究でも一致率は安定しておらず、意味の深さの定義をさらに明確にし、評定基準を精緻化することが求められる。

また、より根本的な問題として、調査者自身の生きる意味についての価値観が評定に反映する危険性がある。たとえば、調査者自身が「関係」を重要な生きる意味の源と考えている場合、「関係」のカテゴリーの記述がそのほかのカテゴリーの記述よりも高く評定されてしまう可能性がある。実際、学部学生に評定させたところ、自分のカテゴリーと同じものを高く評価するという傾向が見られている (Ebersole & Kobayakawa, 1989)。

以上のように、MEDは、意味のカテゴリーと深さについて質的なデータをもとに検討する、という独自の観点から作成された尺度であるが、幾つかの注意すべき点があり、特に意味の深さに関しては、その概念定義や評定のあり方など、今後検討するべき点は多いであろう。

## まとめ

本研究では、生きる意味のカテゴリーと深さを分析することを通し、青年が何に生きる意味を見出しているか、ということが、生きる意味の深さや、生きることに意味を感じられないという実存的空虚感といかに関わっているのか、ということを検討した。その結果、意味の深さと実存的空虚とは負の関連があることや、主観的な「喜び」を生きる意味とする者よりも、他者との「関係」に意味を見出している者のほうが、生きる意味の深さが深く、実存的空虚感が低いということなどが明らかになった。特に今回の研究において、何に生きる意味を見出しているかということによって、個人の生きる意味の深さや空虚感が左右されるということが示唆されたことは、広くは生きがいやQOLの問題を考える上でも重要であると考えられる。これまでの個人的意味の研究においては、個人が生きる上で何を重要視しており、それにどれだけ意味を感じているか、ということに主な焦点が当てられてきたが、個人がいかなる意味を見出し、それにどれだけ深くコミットしているか、という生きる意味の質の問題についても、知見の蓄積が必要であろう。

## 謝辞

本論文の作成にあたり適切なご指導をいただきました、京都大学大学院教育学研究科のやまだようこ教授に記してお礼申し上げます。また、調査にご協力いただいた看護専門学校生の皆さんにも心より感謝申し上げます。

# 引用文献

- Battista, J., & Almond, R. (1973). The development of meaning in life. *Psychiatry*, **36**, 409-427.
- Crumbaugh, J. C., & Maholick, L. T. (1969). *Manual of Instruction for Purpose in Life Test*. Munster, In: Psychometric Affiliates.
- DePaola, S. J., & Ebersole, P. (1995). Meaning in life categories of elderly nursing home residents. *International Journal of Aging and Human Development*, **40**, 227-236.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1980). Categorization of college student's meaning of life. *Psychological Reports*, **46**, 387-390.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1981). Adult's meaning in life. *Psychological Reports*, **49**, 87-90.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1983). Young adolescents' meaning in life. *Psychological Reports*, **52**, 427-431.
- DeVogler-Ebersole, K., & Ebersole, P. (1985). Depth of meaning in life: Explicit rating criteria. *Psychological Reports*, **56**, 303-310.
- Ebersole, P. (1998). Types and depth of written life meanings. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The Human Quest for Meaning: A Handbook of Psychological Research and Clinical Applications*. London: Lawrence Erlbaum Associates, pp. 179-191.
- Ebersole, P., & DePaola, S. (1987). Meaning in life categories of later life couples. *Journal of Psychology*, **121**, 185-191.
- Ebersole, P., & DePaola, S. (1989). Meaning in life depth in the active married elderly. *Journal of Psychology*, **123**, 171-178.
- Ebersole, P., & DeVogler, K. L. (1981). Meaning in life : Category self-ratings. *The Journal of Psychology*, **107**, 289-293.
- Ebersole, P., & Kobayakawa, S. (1989). Bias in meaning in life ratings. *Psychological Reports*, **65**, 911-914.
- Ebersole, P., & Quiring, G. (1991). Meaning in life depth: The MILD. *Journal of Humanistic Psychology*, **31**, 113-124.
- Frankl, V. E. (1963). *Man's Search for Meaning*. New York: Washington Square Press.
- Frankl, V. E. (1972). *Ausgewahlte Vortrage uber Logotherapie*. Verlag Hans Huber.
- (フランクフル, V. E. 山田邦男 (監訳) (2004). 意味による癒し—ロゴセラピー入門— 春秋社)
- 糸島陽子 (2005). 死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較— 京都市立看護短期大学紀要, **30**, 141-147.
- Jenerson-Madden, D., Ebersole, P., & Romero, A. M. (1992). Personal life meaning of Mexicans. *Journal of Social Behavior and Personality*, **7**, 151-161.
- 金児暁嗣 (1997). 日本人の宗教性—オカゲとタタリ—の社会心理学—. 東京: 新曜社
- 中新美保子・谷原政江・長江宏美・大場広美・太田にわ・砂田正子・山口三重子・留田通子・福山礼子 (2005). 看護学生の心理社会的発達—看護大学生・看護専門生・非看護系学生の比較— 川崎医療福祉学会誌, **15**, 289-293.
- Neimeyer, R. A. (Ed.) (2000). *Meaning Reconstruction & the Experience of Loss*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Reker, G. T., & Chamberlain, K. (Eds.) (2000). *Exploring Existential Meaning: Optimizing Human Development across the Life Span*. California: Sage.
- Reker, G. T., & Wong, P. T. P. (1988). Aging as an individual process: Towards a theory of personal meaning. In J. E. Birren & V. L. Bengtson(Eds.), *Emergent Theories of Aging*. New York: Springer, pp.214-246.
- Reker, G. T. (1991, July). *Cotextual and thematic analyses of sources of provisional meaning: A life-span perspective*. Paper presented at the Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioral Development, Minneapolis, MN. (Reker, 2000より)

- Reker, G. T. (1996). *Manual of the Sources of Meaning Profile-Revised (SOMP-R)*. Peterborough, ON: Student Psychologists Press. (Reker, 2000より)
- Reker, G. T. (2000). Theoretical perspective, dimensions, and measurement of existential meaning. In Reker, G. T., & Chamberlain, K. (Eds.), *Exploring Existential Meaning: Optimizing Human Development across the Life Span*. California: Sage, pp. 39-55.
- Rokeach, M. (1973). *The Nature of Human Values*. New York: Free Press.
- 齋藤和樹・小林寛幸・丸山真理子・花屋道子・柴田健 (2002). 看護学生における人生の意味・目的意識の変化について—PILのパートAの縦断的分析— 日本赤十字秋田短期大学紀要, 6, 9-18.
- 齋藤和樹・小林寛幸・丸山真理子・花屋道子・柴田健・田多香代子 (2000). 看護学生の学科志望動機, 人生の意味・目的意識, 性格特性の関連について—PILとTEGの分析を通して— 日本赤十字秋田短期大学紀要, 4, 3-8.
- 齋藤和樹・丸山真理子・小林寛幸・花屋道子・柴田健 (2001). 看護学生の学科志望動機, 人生の意味・目的意識, 性格特性の関連について (Ⅱ) 日本赤十字秋田短期大学紀要, 5, 43-47.
- Showalter, S. M., & Wagener, L. M. (2000). Adolescents' meaning in life: A replication of DeVogler and Ebersole (1983). *Psychological Reports*, 87, 115-126.
- Taylor, S. J., & Ebersole, P. (1993). Meaning in life in young children. *Psychological Reports*, 73, 1099-1104.
- 浦田悠 (2005). 人生の意味への問いについての一考察—現代青年の人生観の諸相—. 大阪大学人間科学研究科修士論文 (未公開) .
- Wong, P. T. P. (1998). Implicit theories of meaningful life and the development of the Personal Meaning Profile. In Wong, P. T. P., & Fry, P. S. (Eds.), *The Human Quest for Meaning*. Lawrence Erlbaum associates.
- やまだようこ (編) (2000). 人生を物語る一生成のライフストーリー—. 京都: ミネルヴァ書房

## 注

- <sup>1</sup> 生きる意味の心理学的研究において, 「meaning of life」, 「meaning in life」, 「life meaning」, 「personal meaning」, 「existential meaning」などの様々な用語が, あまり厳密に区別されることもなく用いられており, 訳語も「人生の意味」, 「生きる意味」, 「生きがい」などが, ほぼ同義のものとして用いられている。また, Frankl理論についての実証的研究においては, 「purpose in life」という用語も使われており, これも上記の用語群とあまり区別されていない。これに関して, 浦田 (2005) は, Ebersole & DeVore (1995) の論などを参考に, 「人生の意味 (meaning of life)」を人類一般の存在理由に関する概念, 「生きる意味 (meaning in life)」は個人的な価値に関する概念として区別することを提唱しているが, 今後, それぞれの用語とその訳語についても, さらなる整理・統一が必要である。また, 心理学の領域では, 「meaning of life」よりも「meaning in life」のほうがより一般的に使用されている。
- <sup>2</sup> Reker & Wong (1988) が個人的意味 (personal meaning) という用語で説明していたのと同じ枠組みが, Reker (2000) では, 実存的意味 (existential meaning) として紹介されていることから, この2つは同義とみなしてよいといえる。
- <sup>3</sup> 「meaning categories」, 「meaning in life categories」, 「types of meaning in life」など, 生きる意味のカテゴリーに関する用語は, Reker & Wong (1988) の「意味の源 (sources of meaning)」と互換的に使用されており, 同義とみなしてよいと考えられる。
- <sup>4</sup> Meaning Essay Document (MED) は, 作成された当初は, 特定の尺度名が付けられることなく使用されていた。その後, Meaning Essay questions (Ebersole & DePaola, 1987), Meaning in Life Depth instrument (MILD) (e. g., Ebersole & Kobayakawa, 1989; Ebersole & Quiring, 1991) などと呼ばれていたが, 近年, Meaning Essay Document (MED) という呼称が, 開発者以外の研究者にも使用されているため (e. g., Reker, 2000; Showalter & Wagener, 2000), 本研究もそれにし

たがった。呼称は異なるものの、いずれも質問内容は同一である。

<sup>5</sup> 浦田（2005）の大学生でのデータについても、この新たなカテゴリーも加えた上で再分析を行った。

（教育方法学講座 博士後期課程2回生）

（受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日）

## Types and Depth of Meaning in Life and Existential Vacuum: A Comparison between Nursing Students and College Students

URATA Yu

The present study examined the relationship between the types and depth of meaning in life and existential vacuum by comparing nursing students with college students. The Meaning Essay Document (MED) and Existential Vacuum Scale (EVS) were administered to 150 nursing students. To classify the study participants, a new meaning category "being" was added to the original eight categories in the previous study. The main results were as follows: Nursing students reported the category of "growth" as central, followed by "relationships" and "pleasure". The college students also reported these three meaning categories as central. However, a chi-square analysis showed a significant difference between categories; the college students emphasized pleasure more strongly than the nursing students did. The first-grade nursing students scored higher than the second-grade students on the EVS, and those classified as the relationships type scored significantly higher than the pleasure type on the MED and significantly lower on the EVS. The results of this study suggest that interpersonal relationships are important for creating or discovering a deep meaning to life, and that personal pleasure is not necessarily positively related to a deep meaning or purpose in life.